

## はじめに

「ケア」ってなんだろう？ 「共生」ってどういうこと？

そんな素朴な疑問が本書を書くきっかけになっている。

人間の営みにはもちろん自然環境も必要であるし、本書を執筆中にロシア侵攻によるウクライナの悲惨な状況やイスラエル・ガザ戦争がSNSを通じて世界中に伝わり、平和であることも欠かせないと感じる。新型コロナウイルス感染症によるパンデミックを経験し、これまでのグローバルな経済システムに組み込まれた生活に危機感を持った人も多かったことだろう。現代社会が経済効率や利己心のもとに動き、「自立」した個人だけを求めているために、さまざまな潜在的ひずみが表面化した。「正義」という名の同調圧力のもとで同質の人同士が徒党を組み、異なる誰かを無視する、無関心でいる、あるいは攻撃の対象として排除した。人間関係性に必要なケアは、構造的差別の中で置き去りにされたままである。また、人びとを一つにまとめようとする人（組織）が「共生」に潜む差別や不平等を隠蔽していないだろうか。ともに生きるという言葉の響きはよいが、そこから<sup>こぼ</sup>零れ落ちている人はいないのか。

2022年に筆者らが全国3,000人を対象に行ったアンケート調査では、ケアに対するイメージ（複数回答）は「介護」（61.5%）が最も多く、次いで「相手への気遣い」（49.0%）や「配慮」（48.4%）であった。われわれが生きている現代社会において、一般的にケアは介護を指し、家族内で行い、どうしても無理な場合に公的支援を受けるものと捉える傾向にあるが、果たしてケアは限られた人の特別なものなのだろうか。

生まれたときを思い浮かべてみよう。誰かに乳を与えられ、共同育児・共食によってようやく生き延びてきた歴史がある。誰かの世話にならなくては生きられなかった。人間は誰もがケアされてきたのである。つまり、ケアは人間生活そのものであって自分を含め誰かのために世話をしあう実

践であり、気に向け配慮するといったエンパシー (Empathy) であり、そして社会的背景に揺らぎながら継続していくうちに活動や配慮の方法を変えていくものである。家事労働と呼ばれる実際の食事の準備や掃除、洗濯など、生活を営む上で不可欠なものを含め、経済効率の範疇にはない人間関係性である。つまり、「ケア」は共鳴・共振・共感的で応答利他的な人間の営みであり生きていくことそのもので、ユニバーサル・ケアと言い換えることもできるだろう。ただし、独善的になれば虐待に陥る危険性もある。社会的価値観や規範、経済状況など社会的文化的背景を無視して語ることにはできないが、ケアを通して、声を上げそれに応えるアドボカシー (Advocacy) を向上させれば関係性も変えていくことができるのではないだろうか。アドボカシーは一般的には「権利擁護」と言われるが、アドボカシーには権利の主体が中心になって単独または集団で訴えるものと、保護者・教師・ソーシャルワーカー・弁護士・アドボケートなど第三者が本人の意見や権利を代弁する形態とがある。本書では、主に自分自身が生きていくために何が必要で何を求めているかに気づき、主体的な生活を営めるよう自己が望むことに対して意見を表明するセルフアドボカシーと、同じ仲間として当事者性をもって寄り添い社会に働きかけるピアアドボカシーやシチズンアドボカシーの育成に着目したい。

人間はどこか欠けた存在である。忘れたり間違ったり、隙だらけで、ヴァルネラブル (Vulnerable: 傷つきやすく弱い) である。学校教育では主体的・能動的に行動することを求められるが、他人の目が気になり羞恥心やしがらみ、規範などと相まって、いつも主体的・能動的になれるとは限らない。とはいえ受動的ばかりでもなく、頼まれて行動するといった意志とは別の状況によってふっと湧き上がる応答利他的感情も持ち合わせている。周囲の影響を受けながら変わっていくのも人間である。そんな人間が行うケアだからこそ、不安や悩みもつきまとう。ケアは利他心の向上や他者理解などの人間の成長ももたらすが、他方責任を伴うという重荷・重圧、世話のために自分の時間が取れないという葛藤、社会から取り残される不安、ケアすることが自己満足に陥りケアされる人のためになっていな

いのではないかという恐れ、虐待、一部の人のみに過重にケアが担わされている役割分業、ケア労働者の低賃金など社会的文脈の中で多義性がある。そんな中で現在のケア支援策で事足りるのだろうか。歴史に唯一の正解はないと考え、そもそもケアとは何か、共生とは何か、生活とは何かという根源的な問いに対して、歴史的・文化的・社会的な文脈から多面的に捉え直し、生きることや生きていくことを問うていく。

また、生きること（＝生活すること）について丁寧に学んでいくのが家庭科である。家庭科はさまざまな人や制度、環境、そして自分自身と対話し、実践して再び考え、いのちと向き合い、さらに過去から現在、未来へと生活を創造し社会に変容を促すものである。戦後新設された家庭科は、生活するという土台の上で社会科学も自然科学も総合的に考察するマスターサイエンスともいえる。高度経済成長期以降の偏差値至上主義から抜け出し、自分らしく最適な生活を過ごすべく家庭科を学び直して生きることを考えてみてはどうだろうか。ただし、「自分らしく」は曲者で選択肢が無限にあるかのようで、進む道がわからなくなる哲学的な問いでもある。だからこそ、時には立ち止まり、ゆったり過ごし、時には熟考し、人や環境や文献と対話して実践する家庭科を学び続けていこうではないか。そうした中で、ライフスタイルを柔軟に変えていくことも可能になるだろう。

筆者らは川村学園女子大学生生活創造学部生活文化学科に所属する僚友であり、ケアの課題に照らした教育研究をしている。「共生」におけた取り組みをしているロービジョン（Low vision）の芳賀優子さん、南北問題に対し生産者とともにつくる民衆交易に取り組む野川未央さんにもご執筆いただいた。生活に対する疑問は本学学生の生の声であり、そこから家庭科を学び直す。一人暮らしでも困らないように簡単な時短レシピも学生たちが考えてくれた。さらに、ヤングケアラーの支援策を考案・企画・実践してくれた麻布高校の生徒には率直な意見<sup>つづ</sup>を綴ってもらった。お読みいただければ、みな生活哲学者であることがわかっていただけるだろう。

これからも生きていく私たちや未来を生きる子どもたちが平和で、選択の自由や尊厳や権利のあるユニバーサル・ケア社会の実現に向けて、本書

が主張する当事者性をもった「ケア」が今後の方向性を考える一助になれば幸いである。

齋藤美重子

アドボカシーが生きるユニバーサル・ケア  
— 学び直しの家庭科 —

---

目 次

はじめに..... i

**第 1 部 総論編 — well-being に向き合うために —**

**第 1 章 ケアとは何か ..... 2**

- 1 社会におけるケアの変遷 3
- 2 ケアの本質と多義性 8
- 3 ヤングケアラー 10
- 4 ユニバーサル・ケアとケアの再定義 14

COLUMN 個人の尊厳は、「できる」を前提にしたケアにあり！ 21

**第 2 章 共生とは何か ..... 23**

- 1 共生概念の歴史的変遷 24
- 2 自立概念の変遷 27
- 3 自立と共生 30
- 4 多様性の尊重と「共生」の再定義 32
- 5 「共生」のための教育 — 家庭科から考える — 33
- 6 アドボカシーが活きる社会 37

COLUMN 海を越えて出会った友だちと共に歩む 43

**第 3 章 生活とは何か ..... 45**

- 1 「生命」とは何か 45
- 2 「生きること」と「生活すること」 46
- 3 生活とは何か — 家政学視点から 47
- 4 人はなぜ着るのか — 衣服がもつ意味・衣生活の意義 48
- 5 人はなぜ食べるのか — 食べる意味・食生活の意義 50
- 6 人はなぜ住むのか — 住まいがもつ意味・住生活の意義 52
- 7 「生活」をよりよくするとは — 環境醸成科学としての家政学 53
- 8 家庭生活、人間生活の同時的認識 54
- 9 家政学、家庭科が考える「家族」とは 55

- 10 家政学における「消費者」とは誰を指すのか 56
- 11 家政学、家庭科において総合性を重視すること 56
- 12 家政学、家庭科における実践性 57
- 13 家政学、家庭科におけるケアの概念 58

## 第2部 家庭科編 — 生活者の哲学として —

### 第4章 大学生の声から考える学び直しの家庭科 ..... 64

はじめに 家庭科教育の目標と学び方 64

- 1 衣生活 66
- 2 食生活 72
- 3 住生活 79
- 4 消費生活 81
- 5 情報化・グローバル化社会と地域社会 86
- 6 人間関係 89
- 7 生活設計・人生設計 95

参考：学習指導案例 — 本時を中心に — 103

### 第5章 麻布高等学校ヤングケアラーを題材にした授業

— 高校生の想い — ..... 111

- 1 授業概要 111
- 2 生徒の学びと共生・ケアに対する想い 115
- 3 授業カリキュラムをとおして 128

### 第6章 一人暮らしの時短簡単レシピ ..... 130

執筆者紹介 ..... 141